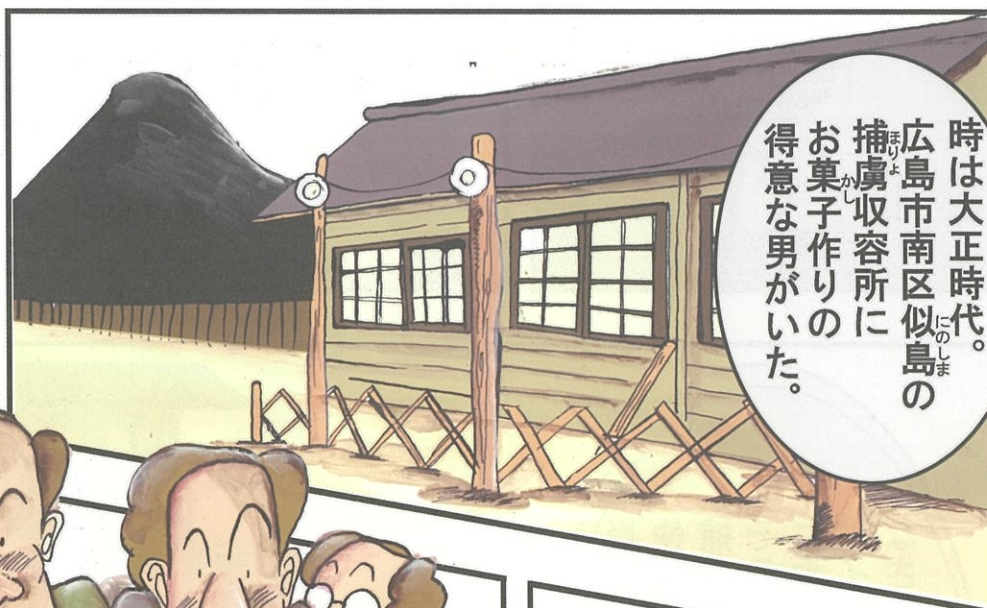
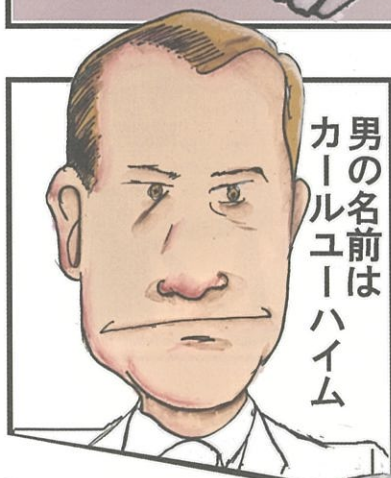
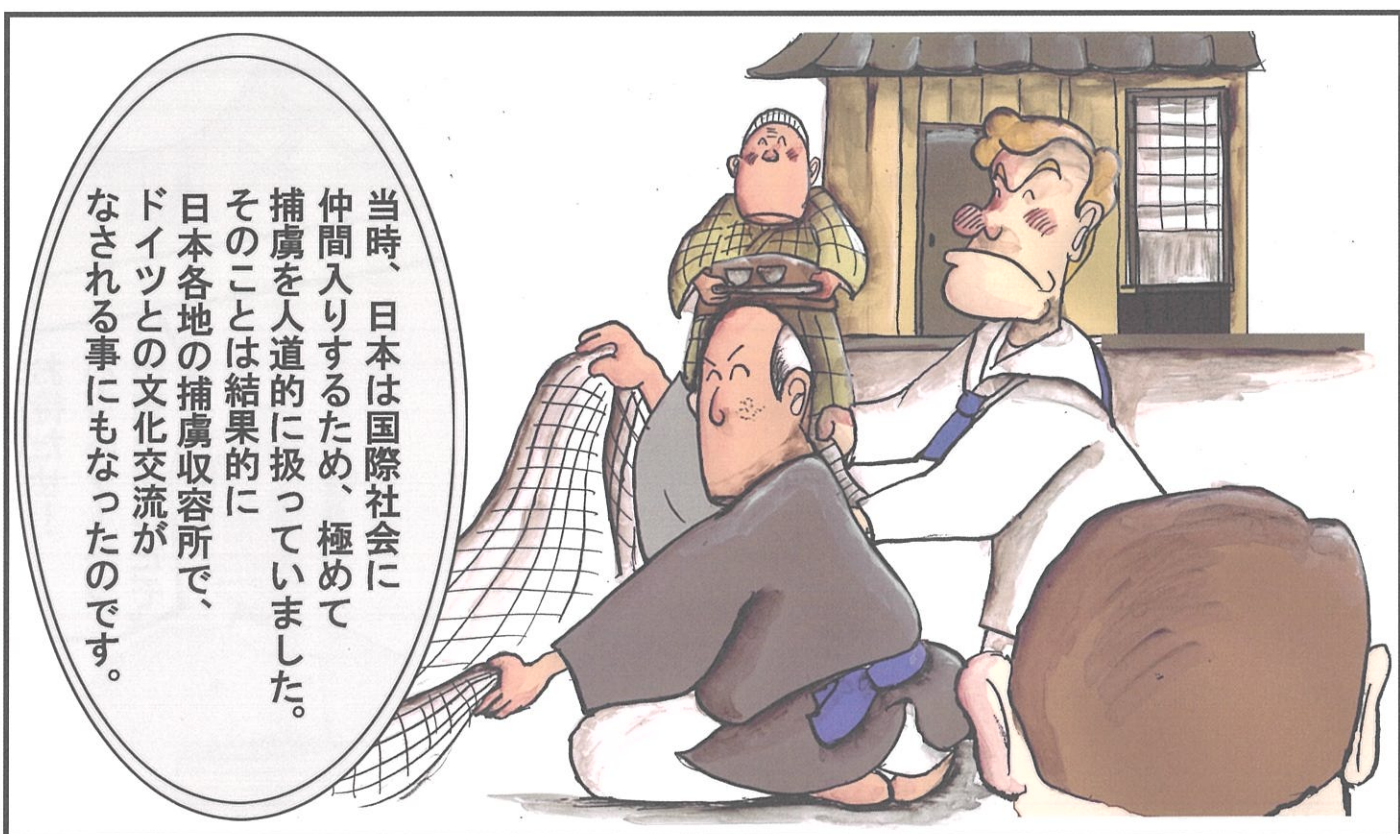
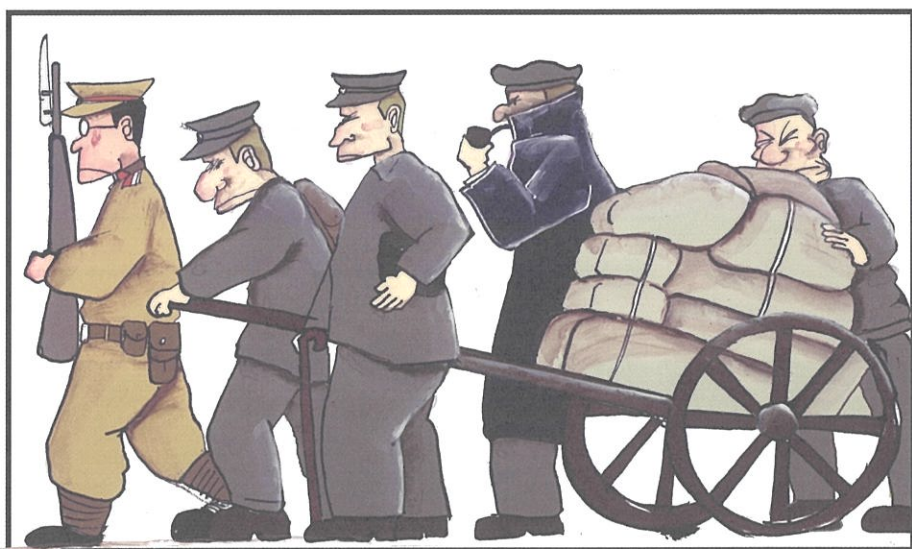
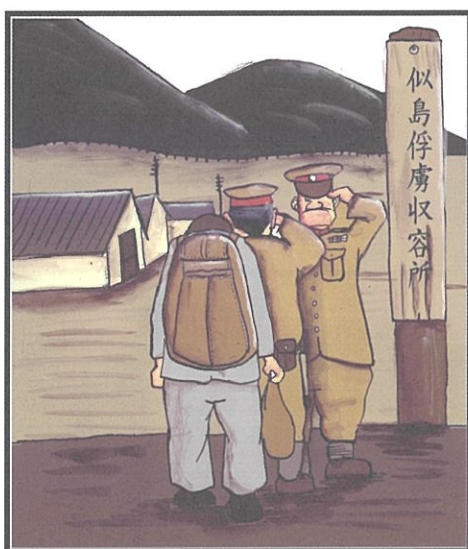
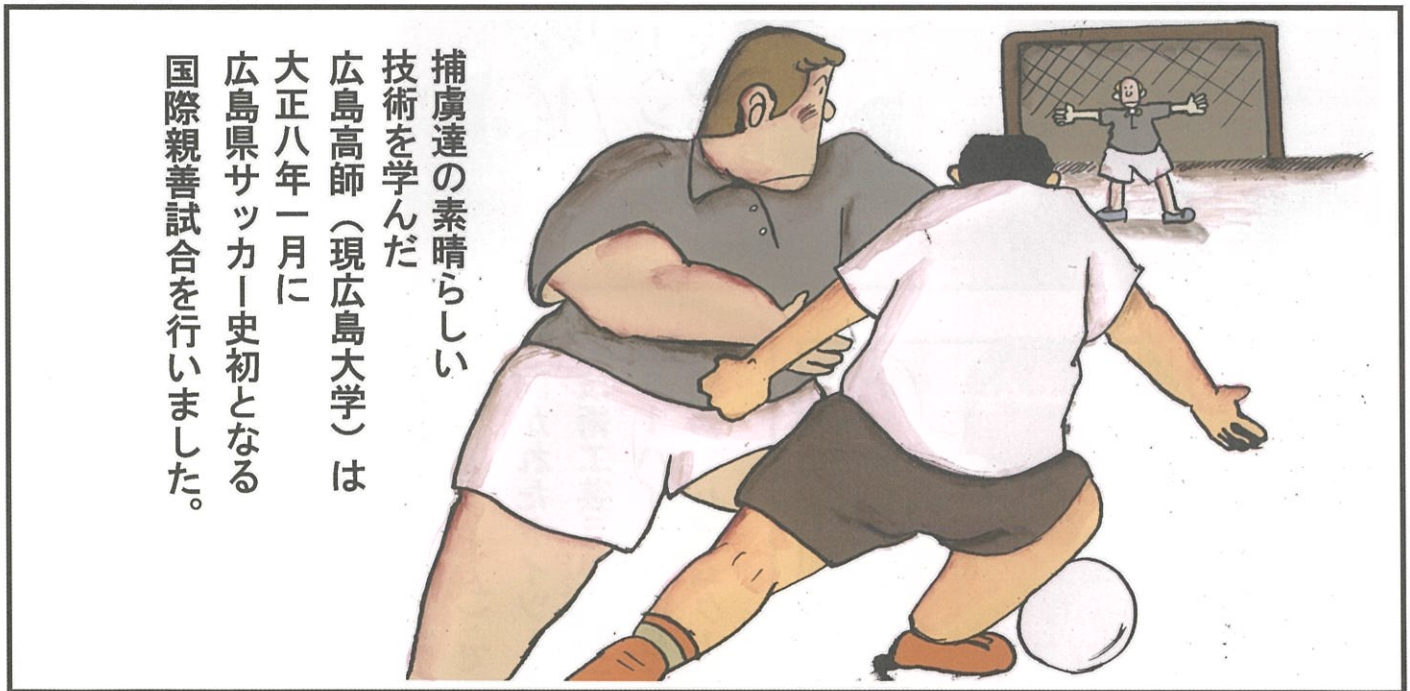


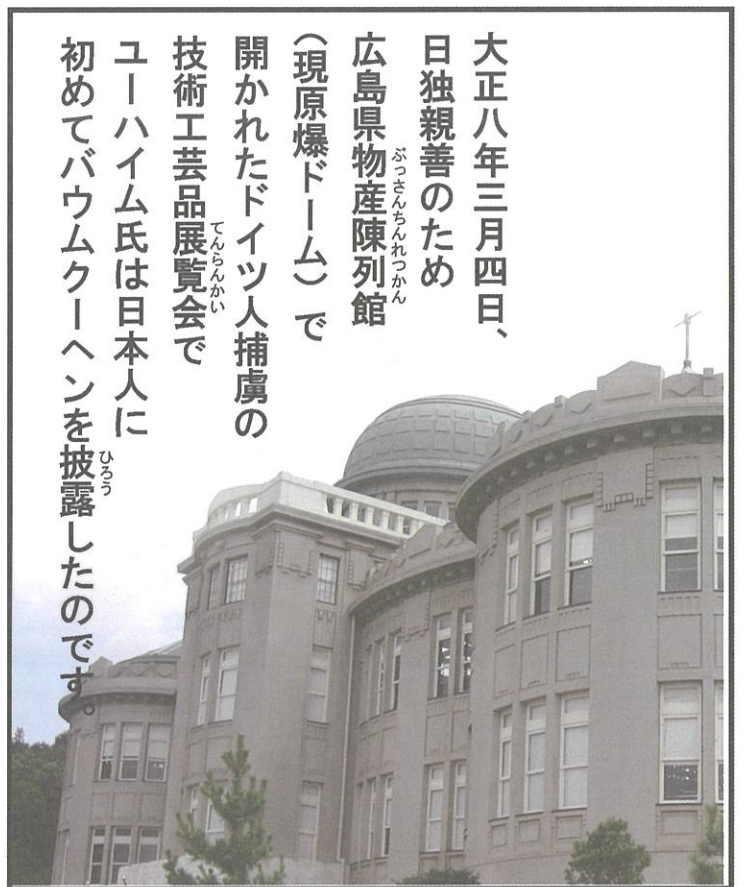
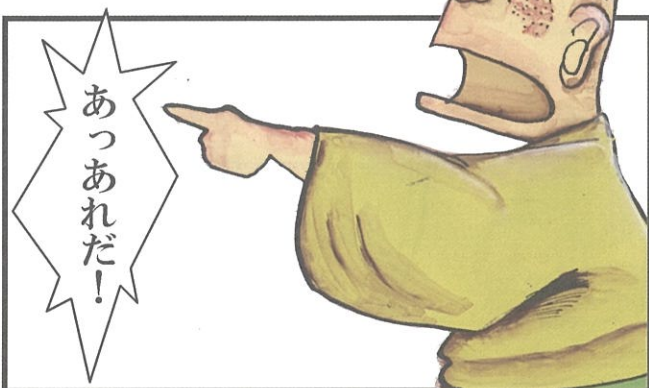
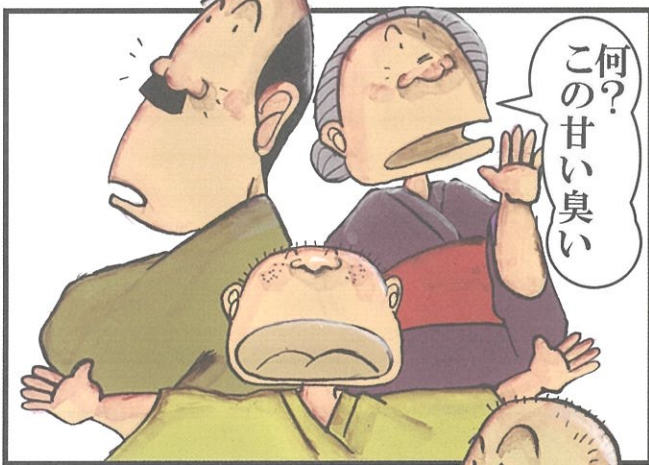






※高師：広島高等師範学校





似島と二ノシマの歩み

似島郷土史研究家 宮崎佳都夫 文責

似島には、住民が歩んだ歴史と日本の近代化の過程で戦争と軍事に吞み込まれた二ノシマの歴史という二つの顔があります。

似島住民の歩み―島名の由来―

歴史資料に刻まれている似島の呼称は、「見の島」、「箕島」、「ミノシマ」、「二島」、「二ノ島」、「二ノシマ」、「似ノ島」、「似島」、「似嶋」などが確認できます。これらは、その時代の人々が当時の似島の有様や安芸小富士の姿を形容する呼称として表現したものと考えられ、大別すると、二つの流れに系統化されます。一つは「にのしま」と読む「二島」（芸備国郡志）、「二ノ島」（広島藩御覚書帖）、「二ノシマ」（瀬戸内海航路図）、「似ノ島」（大日本治海輿地全図・伊能図）、「似島」（芸備国郡志）、「似嶋」（各種陸軍測量作成図）などであり、他は「みのしま」と読む「見の島」（輝元公上洛日記）、「箕島」（芸備国郡志、藝藩通志）、「ミノシマ」（従上之関至大坂海上図）の流れです。「似島」、「箕島」の何れも安芸小富士を形容した呼称であり、山容を箕に例えた林春信は「藝藩通志」の中で「箕島嶺」の漢詩を詠み、同じく木下順庵は「神崎八景」の中で「箕峰晚雲」の漢詩を詠み、箕に似た峰を描いています。一方、霊峰富士に準えた代表作としては、阪井虎山の漢詩「小富士晴雪」が挙げられます。

こふ じせいせつ
小富士晴雪

さかいこぞん
阪井虎山

東海芙蓉雲際撃（東海の芙蓉雲際（雲）に撃る）
寸根移向藝南生（寸根を移藝南に向って生ず）

看疑夜半紅暎映（見て疑ふ夜半紅暎の映するを）
水露蒼茫山雪明（水露蒼茫山雪明かなり）

みのしま 嶺 嶺

羣峯兀々如劍（羣峯 兀々 剣の如く）
孤島退々似箕（孤島 退々 箕に似たり）
水底月篩寒玉（水底の月は寒玉を篩ひ）
山頭風剪雲絲（山頭の風は雲絲を剪る）

このように阪井は富士、林は箕にそれぞれ準えて名峰安芸小富士を讃える漢詩を詠んでおり、当時は両呼称が共に使用されていたと類推されます。現在に至る間、虎山の「小富士晴雪」に代表されるように、富士に似た小さな山を擁する島を形容する名前として「にのしま」が字号（漢字）「似島」として認知されたと考える説に整合性が認められます。このことを補足する歴史的な証左として、島内では「富士田」、「富士井」、「富士野」などの富士を苗字（姓）に供した経緯があります。

住民の歩み

古老らの口伝などによると、最初、似島に人が定住したのは佐伯郡白砂村（現在の佐伯区湯来町）からの数戸（三戸ともいう）という。しかし、その時期を明確に特定することは困難であるが、広島市内中心部の寺院の記録には三百五十〜六十年前の慶安・寛文年間頃、既に「似の嶋、似之嶋」の人が記録されています。

その後の軌跡を辿ると、元文五年（一七四〇）に似島荒（竜 神社を勧請し）（仁保村志）、文化文政年間（一八〇四〜三〇）には五十戸の民

家ありと芸藩通志に記載され、ほぼ同時期の天保年間（一八四〇）頃には、現在も、島の中心的施設として存在する説教所建物を当時住んでいた五十余戸の住民のみで建立した、と口伝で伝えられています。明治以降をみると、日清戦争当時（明治二十八年）には戸数が百十八（芸備日々新聞）で、人口六百七十三名、日露戦争当時（明治三十七年）には戸数が百五十余戸（明治三十七年満洲大日記）、広島市に編入される直前の昭和三年には戸数が二百三十八（仁保村志）と記録されています。その後は、昭和八年に戸数が二百九十三戸（人口千七百四十四名）、昭和二十二年には人口が二千二百六名となり、時代と共に戸数、人口は漸次増加した。行政組織による調査で似島の人口が最大となったのは、昭和四十四年の二千九百四十六名でした。その後は人口の減少が継続し、平成元年には二千名を割り込み、現在は千百有余名となり、過疎化が急激に進行し、限界集落（地区）を現実の問題として認識せざるを得ない状況が目前に迫っています。

戦争に関わる二ノシマの歴史―陸軍検疫所

明治二十八年（一八九五）、日本近代史で最初の対外戦争となった日清戦争の終結時に、朝鮮半島や台湾方面からわが国へ帰還する将兵の検疫が喫緊の課題の一つとなりました。急遽、陸軍は臨時陸軍検疫所の設置を決定し、宇品港の入口に位置する似島の長谷地区（現在の似島学園の場所）に世界に冠たる規模と能力を有する施設を建設し、当時、世界的に流行していた虎列拉病（コレラ）などの伝染病を水際で防ぎました。

その十年後の明治三十八年（一九〇五）には日露戦争が終結し、当時の満洲地方や朝鮮半島から帰還する将兵を検疫するため、前記の（第一）検疫所を再び使用するとともに、新たな（第二）検疫所を似島の東大谷地区（現在の少年自然の家）に建設し、六十一万名に及ぶ日本軍の帰還将兵のみならず、旅順開城、奉天の

会戦、日本海海戦などで俘（捕）虜（りょ）となった五万余名のロシア軍将兵の検疫も行いました。

その後の陸軍検疫所は、第一検疫所が他の軍用施設として転用されたのに対し、第二検疫所は第一次世界大戦、シベリア出兵、山東出兵、日中戦争などの帰還将兵の検疫施設として太平洋戦争終結まで存続しました。

なお、大正六年から同九年までの丸三年間は、大阪から転収容されたドイツ軍俘虜の収容所として施設の一部が使用されました。

関妃殺害（朝鮮事件）首謀者らの検疫と逮捕

日清戦争が終結して間もない明治二十八年（一八九五）十月、朝鮮王国の関妃（明成皇后）は朝鮮半島を巡る日本とロシアの軋轢が起る情勢の中で、在朝鮮駐節公使の三浦梧楼を首謀者とする日本の文官、軍人（軍隊）、民間人らによって殺害されました。国際的な非難を恐れた政府は、恥すべき蛮行の事件に深く関った日本国公使、楠瀬幸彦中佐らの日本軍人や民間人らに対し、本国召還の為に退韓命令を出し、帰国した彼らは似島に上陸し、検疫所（現在の似島学園の場所）で検疫を受けました。その後、検疫所内で三浦公使らは広島県警察部に、軍人らは憲兵隊にそれぞれ逮捕されました。三浦ら文官は広島控訴院の予審に付され、楠瀬ら軍人は軍法会議に廻されましたが、翌年、何れの容疑者も容疑不十分で無罪となりました。

俘虜収容所

日露戦争時に俘虜となった七万二千名のロシア将兵の大多数（五万一千名）は、似島検疫所で検疫を受けた後、全国に急遽設置された俘虜収容所へ宇品停車場から列車で送られました。似島収容所はロシア俘虜の輸送が滞った際に臨時的、便宜的あるいは調整弁的な機能を有する収容施設として似島検疫所内に設置されと推量されます。

ロシア俘虜の検疫、収容から約十年後の大正六年（一九一七）には青島（チンタオ）戦争におけるドイツ俘虜五百四十数名が大阪から移送され、似島の第二検疫所内の収容施設で三年間過すこととなりました。その間、彼らは収容所内で多種、多岐にわたる活動を行っています。講習会としては語学（ドイツ語、日本語、英語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語）、数学、機械工学、建設工学、電気学、経済学、法学、歴史、タイプライターなどがあり、演劇活動も盛んに行われ、新聞（似島新聞）の発行も行いました。

彼らは自国ドイツの進んだ工業技術などを紹介する独逸俘虜製作品展覧会を広島県物産陳列館（現在の原爆ドーム）で開催し、広島高等師範学校においてサッカーを始めとする各種スポーツの演技会や音楽会を開催し、広島市民を驚愕、感動させました。

収容者の中にはバウムクーヘンで著名なカール・ユーハイムがおり、ハム・ソーセージ製造で有名なヴォルシユケはケルン、シュトルの三人で広瀬町にあったハム製造会社の酒井商会で製造技術の指導を行っていました。

その他の軍事施設

大正時代に至ると、第一検疫所は広島市内にあった陸軍兵器支廠から弾薬庫の一部を移設して似島弾薬庫（後に兵器支廠似島分廠）となり、陸軍運輸部の倉庫等としても使用されました。

昭和十年代半ば頃には大田地区から南風泊地区にかけての広大な土地（現在の似島小中学校の場所）に馬匹検疫所が設置され、軍用馬の検疫が行われました。

昭和十九年から二十年にかけては、海の特攻と呼ばれた海上挺進戦隊（秘匿名・マルレ）の訓練基地も置かれました。

昭和二十年、深浦地区には半潜航攻撃艇（秘匿名ハンセンコ）の教育訓練基地が設置されたが、艇の実戦配備前に敗戦となりました。

その他、太平洋戦争中には長浜地区に燃料貯蔵施設、中の原地区に特攻隊用の兵舎群、サルババヤマゴヤの山上に高射砲陣地などが設置されました。

このように、似島の主な平坦地は軍事、軍用の基地

や施設が集中的に設置され、似島住民の生活を圧迫しました。

戦後、軍によって強制借上げされた、これらの土地は、元の地主に返還され、強制的に買収された軍用地は民生施設などに転用されました。因みに元第一検疫所跡は社会福祉施設の似島学園に、元第二検疫所（ドイツ俘虜収容所）跡は青少年育成の野外活動施設の臨海少年自然の家に、又馬匹検疫所跡は学校教育施設の似島小中学校にそれぞれ転用されて現在に至っています。

二ノシマと原爆の関わり

昭和二十年八月六日に投下された一発の原子爆弾で広島市の街地は地獄絵図と化しました。被害者となった方のうち、似島まで搬送され、陸軍検疫所に収容された負傷者は一万名以上と言われ、その大多数の方の尊い命が奪われました。被爆後、六十有余年を経た今日、原爆犠牲者への馳せる想いと核兵器保有の無意味さ、核使用の無残さの意識が風化しつつある現況に鑑み、似島における原爆犠牲者の当時の実態と犠牲者の遺骨収集・供養の歴史を中心に据えて記述します。

被爆時における似島住民の状況

八月六日朝の似島住民は通常通り海や畑、あるいは軍事施設に出掛けていました。爆心地から似島の直線距離は、島の北端で約八キロメートルであったことから、原爆投下時の被害は軽微でした。

原爆炸裂時の爆風圧による家屋の倒壊、破壊は殆んどなかったが、家屋の一部崩壊は数戸程度、小破と無傷が半々程度でした。しかし、大半の家屋では窓ガラスなどが強い振動と爆風によって破壊されました。炸裂時に戸外にいた住民は肌の露出部分に熱風のような異常な熱さを感じたものの、熱線による火傷の症状を呈する者はいませんでした。

しかし、通勤や通学あるいは公用・私用で市中に出掛けた人の中には、即死者や負傷者が相当数あり、被爆一カ月後の集計で死者が百八名と記録されているが、それ以後も死者が続出しているものの、正確な犠牲者数は不詳です。

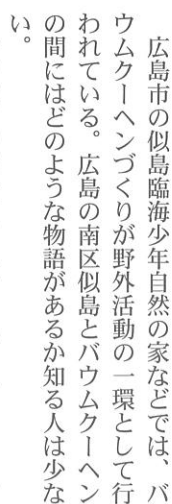
臨時野戦病院の開設と救護活動

原爆投下の約一時間半後の午前十時過ぎ頃から市中で被爆した負傷者が船で続々と運ばれて来始めました。これらの負傷者は救護所に指定されていた検疫所と似島説教所へ収容され、異常な事態に住民は総出で救護活動に従事しましたが、その後も間断なく負傷者が搬送されて来て、似島全体が異様な興奮と空気に包まれていきました。当時、検疫所内には船舶防疫部や船舶衛生隊が配属されていましたが、島外からも海上挺進戦隊編成前の教育兵などの応援部隊の要員が続々と派遣されて来ました。市中で収容された負傷者が陸軍船舶司令部所属の各部隊によって続々と搬送されてきましたが、似島に到着するまでに息切れた者も相当数おり、その時の野戦病院の情景は収容された負傷者の断末魔の絶叫や呻吟、悲鳴、号泣が似島全体に渦まいたと言われています。このような状況の中、軍による必死の収容、治療、看護の業務が昼夜を問わず行われ、似島住民も挙って協力し、殊に女性達は個々人の全力を傾注して献身的な救護活動に従事しました。六日以降、夥しい数の負傷者が収容され、その総数は一万名以上に及びました。

犠牲者の火葬は十日頃から開始され、当初は似島火葬場（地元の焼場）で行い、丁寧に一体毎に行われたが、死者が急増したため、死体の山ができる有様となり、別途に似島馬匹検疫所の広場や空地で数体あるいは十数体をまとめて火葬処理しなければならぬ状況となりました。又、馬体焼却炉も火葬に供して対応しました。その後、死者が益々増加してきたことから、検疫所に隣接する防空壕内にも一時的に死体を安置しました。その後も増大する死体の火葬に対応しきれなくなったことで、馬匹検疫所の建物と建物の間の空地に大きな壕を掘り、沢山の死体を投入して土葬にしました。この時に埋葬した犠牲者の遺骨は、昭和二十二年に約二千体が収容され、その二十四年後の昭和四十六年にも同地で五百十七体が発掘、収容されています。さらに年月が経過した平成十六年には、推定八十五体分の遺骨と六十五点の遺品が発掘されました。これらの遺骨は、その都度、似島から搬出した後に高天原で火葬され、平和記念公園内の広島市戦災死没者供養塔に合祀されています。



南区魅力発見委員会風土記編さん部会 森岡由紀子



その物語の主人公の名はカール・ユーハイム。今から九十年ほど前、ドイツの租借地であった中国のチンタオ（青島）で、彼はドイツ人相手にケーキを焼いていた。第一次大戦でドイツに宣戦布告した日本が、チンタオを陥落させたのが一九一四年（大正三）十一月だった。結婚したばかりの彼は多くの捕虜と一緒に日本へ連行された。そして一九一七年（大正六）二月大阪の収容所から似島に移された捕虜の中に彼もいたのである。

開設当時の似島の捕虜収容所の収容人数は、五百四十名あまり、場所は、現在の似島臨海少年自然の家あたりで、建物・畑・テニスコート・サッカー場を含めた一万六千平方メートルほど。捕虜となった人々は色々な作業についており、印刷所では新聞も発行されていたという。

一九一八年（大正七）十一月ドイツが降伏し、捕虜達にはより一層の自由が与えられることとなったのであろう。一九一九年（大正八）一月には、捕虜チームと広島高等師範の学生とのサッカーの試合が行われている。

そんな中、ユーハイムは捕虜収容所でパウムクーヘンを焼いていたわけであるが、彼が最も活躍したのが大正八年三月四日から広島県物産陳列館（現在の原爆ドーム）での俘虜製作品展覧会だった。初日の入場者は七三九五人を数え、その後も押すな押すなの大盛況が続いたという当時の書物によると工芸品、絵画、サンドウィッチやコーヒーなどという、当時としては、まだまだ珍しいものが並び、多くの市民をヨロコッパに行つた気分になせたとある。

中でも菓子には、初日だけで百五十円を売り上げ、一番の人気商品だった。当日の様子を報じる中国新聞には「その売り場の前は、場内一の雑踏で三人の捕虜の係員は目の回る忙しさ。しかも写真班を連れて行くと『ココ写してください』と・・・」と紹介されている。これが日本人とユーハイムが作ったパウムクーヘンが最初に合出した出来事とされる。

一九二十年（大正九）に捕虜生活から開放されたユーハイムだが、そのまま日本に残り、横浜に自分の菓子店を開く。しかし、関東大震災で全てを失い、命からがら船で逃れた神戸で店を再建する。ドイツ、中国、日本と波乱万丈の人生を過ごしたユーハイムだが、そんな彼が南区似島の地に残したバウムクーヘンは今や全国に広がりを見せている。

広島市内の高層ビルから広島湾方面を望むとき綺麗な三角の山に出会う。この「安芸小富士」と呼ばれる似島は、釣りやサイクリング、登山やキャンプなど自然に親しめる島として学校の課外活動や家族連れのリジャーのメッカとなっている。一方で明治から昭和にかけて様々な歴史遺産が今も残され、軍都として栄えた広島市の歴史の側面をうかがい知ることができる。



船
20
分

フェリー・栈橋（学園）

徒歩5分

徒步 40分

似島臨海少年自然の家

徒步40分

フェリー・棧橋（家下）

船
20
分

広島港

発行：南区魅力発見委員会
（南区役所 市民部地域起こし推進課内）
〒734-8522 広島市南区皆実町一丁目 5 番44号
TEL 082-250-8935 Fax 082-252-7179